

第8 モデル事例紹介

ここでは、これまで述べた薬物依存症支援の基本、関係機関の役割をふまえ、モデル事例を用いて「現在の課題と支援の方向」と「課題に対する関係者（機関）の関わり」について、主に、精神保健福祉センターや保健福祉事務所（保健所）が主体となってケアマネジメントやコーディネートを行い、相談対応を進める場合の内容を例示しています。相談対応後の見通しをイメージするために、「相談後の変化」も記載しました。

各相談対応機関において、薬物依存症相談にどのような体制で誰が対応するか、事前にシュミレーションしておくこと、あわてずに対応することができます。

なお、ここで取り上げたモデル事例は、平成22年度に実施した個別調査の事例を参考にした架空の事例です。また、相談対応の進め方は一例であり、対応の全てや正解ではないということを申し添えます。



モデル事例 I

「本人に問題意識がなく、家族との相談を継続した事例」

1 事例の概要

30歳代男性。同胞はなく、両親は中学1年時に離婚。実家のある市内のアパートで单身生活、無職。

父親がアルコール依存症で、幼いころから暴力に怯えて過ごし、近くに住む母方祖母宅が母子の逃げ場所だった。母親が昼夜働いたため、祖母に面倒を見てもらっていたが、小学5年時に祖母が亡くなってからは不登校、非行傾向となった。定時制高校入学後からシンナー使用が始まり、すぐに退学。イライラして眠れず昼夜逆転になったため、母親が自分の処方薬である眠剤を分け与え飲ませていた。シンナーはやめたものの、部屋にこもって生活するようになり、働くよう言うと母親に暴力を振るった。20歳頃からは睡眠薬、抗不安薬の依存が強くなり、母親に薬を要求し暴力を振るい、さらに自ら薬を求めて精神科医療機関を複数受診するようになっていた。母親は暴力に耐えかねアパートを借り本人を一人で住ませ、家賃や生活費の負担、食事の世話までしていた。どこにも相談したことがなかったが、母の兄の勧めで、母が精神保健福祉センターに「息子の暴力の相談」として訪れた。

母親は、「息子がこうなったのは自分のせいだ」という思いから、呼び出されると夜中でも駆けつけたり、「お前が悪い！謝れ！」と言われると何時間も謝らされたりと、本人の言いなりになっていた。日常の世話に加え薬を飲みすぎないように薬を探して捨てることにとらわれ、母はかなり疲弊していた。

2 現在の課題と支援の方向

- (1) 本人の暴力や不就業の背景に、処方薬依存の問題があり、依存症治療が必要。本人の自覚は不明。
- (2) 母親は、問題の根本が薬物依存症であるという認識がなく、手助け行動（イネイブリング）を繰り返している。夫のアルコール問題から長期にわたり問題を抱えた状態であり、母親自身のケアが必要。
- (3) まず母親との相談を継続し、依存症を理解し正しい対応ができるよう支援する。本人の依存症ステージの評価、治療動機付けを図る。

3 課題に対する関係者（機関）の関わり

相談対応機関

【精神保健福祉センター】

- ・母親との継続した個別相談により母の精神的負担の軽減を図りながら、「病気」であることの認識を深めイネイブリング行動を修正。依存症家族教室における依存症知識と対応方法の集団教育、社会資源の活用を紹介、孤立の解消を図る。本人の身体的精神的状況を把握し、暴力時の110番通報等、緊急時の対応を確認・指示する。
- ・本人に対しては、母親が薬物問題に関わらない代わりに、本人の相談先としてダルクと精神保健福祉センターを母から伝えるよう指導。
- ・本人の処方薬依存状態について、母から精神科主治医へ相談してもらう。
- ・母親の了解のもと保健所保健師と情報共有し、徐々に個別支援の主体を保健所保健師へ移していく。

【保健所】

- ・依存症の精神医学的状況と緊急性判断のための精神保健相談利用。
- ・緊急時の医療導入に向けた検討。

4 相談後の変化

(1) 本人の変化

処方薬が手に入らないことによる離脱症状、体調不良を自覚したり、母親や主治医に対し攻撃的となったことで薬物問題が顕著化し、警察や保健所が本人に関わるきっかけとなった。

(2) 家族の変化

依存症家族教室に断続的であるが参加。本人の理不尽な要求に応じることがなくなり、暴力に対しては警察に相談し、本人に「助けを求める先は私ではなくダルクだ」と毅然とした態度が取れた。

モデル事例 II

「依存症治療開始に向けた支援を行った事例」

1 事例の概要

20歳代男性。主な依存は鎮咳薬。両親と同居。3歳年上の姉が県外に嫁ぐ。

東京で大学浪人中に好奇心で鎮咳薬を多量服薬したところ、喉の快感を味わい薬物に興味を持った。同時期、インターネットで大麻やMDMA、覚せい剤等様々な薬物を手に入れ試したが怖くなり、主に鎮咳薬を常用した。薬物を買う資金を得るため、予備校を勝手にやめアルバイトをし、嘘については両親に送金を頼んだ。金が足りず度々薬を万引きするようになり、何度目かの万引きで逮捕、両親の知るところとなり3年前に長野県の自宅へ連れ戻された。自宅近くのアルバイトに就いたが薬はやめられず、倒れて総合病院に搬送され数日の入院を3回、イライラや不眠となり精神科への短期の任意入院を2回経験したが、外来通院はしなかった。両親に対して「薬がやめられない。もう人生がどうにもならない、だめだ」との言葉が聞かれるようになった。

両親は、本人が自宅へ戻った時から保健所の依存症家族教室に参加していた。保健師の勧めで地域の依存症対応クリニックに母親が相談を続け、薬物使用時には関わらないこと、薬をやめる取り組みを支持するよう指導を受け、対応を実行しながら本人の治療導入の機会を見ていた。医師から、「薬物依存症治療プログラムを受けるため、公的病院への入院とダルク入所はどうか。」と言われ、次回本人も一緒にクリニックに行くことになったが今後が不安だと、母から保健所保健師に相談があった。

2 現在の課題と支援の方向

- (1) 両親は薬物依存症を理解し正しく対応できている。本人は自力で薬をやめられない自覚ができた。
- (2) 保健所が主体となり本人、家族、クリニック、公的病院の連携を図り、依存症治療開始と断薬継続のための支援方針を共有する。

3 課題に対する関係者（機関）の関わり

相談対応機関
<p>【保健所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母親の不安な気持ちを受け止め、不安解消のために依存症治療やダルクについての必要な情報を提供し、両親の理解を得る。 ・クリニック医師の指示を確認し、本人、家族、公的病院スタッフとの入院に向けた連絡調整（ケア会議）を行う。
医療機関
<p>【クリニック】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本人に対する依存症治療の動機付けと、入院予定の公的病院への診療情報提供。 <p>【公的病院】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族の理解を得るために、入院前に病院の相談担当者を特定し家族相談の実施。（希望により本人も） ・入院後は、専門プログラムによる教育、地域自助グループのミーティング参加を支援。ダルクの活動理解を図る。 ・退院に向けてダルク、地域の自助グループ、保健所等関係機関や家族との連絡調整。（ケア会議）
ダルク
<ul style="list-style-type: none"> ・入院中に本人及び両親の施設見学、スタッフとの面接相談を実施。

4 相談後の変化

- (1) 本人の変化

クリニック医師が否定せず本人の話を聴いたため、孤独で自暴自棄となっていたことを正直に語り、依存症治療プログラムを受けるための入院と、退院後はダルクに入寮することを承諾した。
- (2) 家族の変化

他の依存症患者と関わることや、本人が一人で入院・入寮することに対して不安を抱いていたが、病院やダルクの見学、スタッフとの相談により安心して本人に勧めることができた。

モデル事例 III

「ダルク入寮のための支援を行った事例」

1 事例の概要

30歳代男性。生後間もなく母親を亡くす。父親には勘当され絶縁状態。兄と姉がいるが所在は不明。

兄の影響で中学生の頃から非行グループと行動を共にし、一緒にシンナーを買いに行ったり使ったりすることに楽しさを感じていた。19歳の時、「頭が冴えて力が出る薬がある」と勧められたのが覚せい剤で、1回で病みつきとなり、それ以降、暴力団に出入りし、犯罪行為にも手を染め、仲間の家を転々としながら覚せい剤を手に入れるために毎日を過ごした。20歳代で覚せい剤取締法違反のため2回の服役を経験したが、出所したその日から覚せい剤を再使用。窃盗等での逮捕も度重なり、荒れた生活を親身になって心配してくれる警察官もいたが、心に留めなかった。34歳の時、覚せい剤を使用し暴れて逮捕、精神科病院に1ヶ月間離脱のため入院した後、3回目の服役。刑務所で薬物依存離脱指導を受けたが、「自分はその気になればいつでも働けるし、薬もやめられる」と、依存症を認められなかった。

出所した日に、覚せい剤が欲しくて以前の仲間に電話をしたが繋がらなかった。とりあえず地元の町に戻り友人に頼んで家に置いてもらうことになったが、自分に対する情けなさや孤独感、自己嫌悪を強く感じた。何度も世話になった警察官に会いたくなり警察署を訪れたところ、警察官は「今度こそ覚せい剤をやめられるよう頑張れ」と励まし、病気の治療と生活の相談のため保健所へ行くよう助言、本人が保健所へ来所し、「3年間も覚せい剤をやめていられたが、また使ってしまうようで不安だ。家も金もなく困っている」と訴えた。

2 現在の課題と支援の方向

- (1) 本人は、刑務所を出所し現実と直面した状態にあり、断薬へのモチベーションが高まっている。
- (2) 本人を受容しながら、経過や現状等必要な情報の聞き取り、問題の整理を行う。医療面の緊急性はないため、ダルクに入寮しながら精神科外来通院の方針とし、必要な生活、経済的支援を検討する。

3 課題に対する関係者（機関）の関わり

相談対応機関

【保健所】

- ・本人を否定せず、正直な気持ちや事実関係を聴き取り、関わりを継続することに心がける。
- ・身体的精神的状況から緊急性や薬物依存症の進行段階を判断し、必要な精神科医療の導入について検討する。（保健師）
- ・本人の特性に適したダルクを選ぶために、県内のダルクに相談。適するダルク（覚せい剤使用者は原則県外に入寮）に受け入れを依頼し、本人の要請があれば、入寮に向けた相談や見学にダルクへ同伴。
- ・経済的支援、生活保護等の検討（福祉ケースワーカー）。
- ・保護者（父親）への連絡、状況報告について本人と相談。父からどんな協力が得られるか確認する。

入寮先ダルク

- ・入寮前に、本人とスタッフの面接や見学を通じた関係づくり。
- ・断薬支援のための治療ができる通院先医療機関の紹介等、受け入れに当たって保健所職員との連絡調整。

4 相談後の変化

(1) 本人

保健所に相談に訪れた翌週に、覚せい剤を使用していた頃の仲間がいない県のダルクに入寮となった。地元の町の生活保護を受給することとなり、生活保護ケースワーカーに定期的に連絡する約束を守っている。ダルクから近くの精神科クリニックに通院しており、少量の向精神薬の服薬により気分の落ち着きが図れ、不眠も解消されてきた。ダルクの生活に慣れるのを見ながら、精神療法に移行する方向。

(2) 父親

本人から、出所後ダルクに入寮したことを報告。保健所保健師から、父の関わりが可能か確認したが、現状では拒否。「ダルクから出るとき考え直すので、その時連絡が欲しい」と父に言われている。

モデル事例 IV

「県外ダルクを利用し、社会復帰に向けた支援を行った事例」

1 事例の概要

40歳代男性。同胞は兄と妹の3人兄妹の次男。過去に結婚し2名の子供をもうけたが、覚醒剤の依存による様々な問題のために離婚。薬物乱用は、中学1年生の時からシンナーの乱用により始まった。中学卒業後、定時制高校を中退。その後、暴走族の仲間から覚醒剤を勧められ、覚醒剤依存となる。

薬物依存症の治療に関しては、家族に連れられて大学病院やクリニックに通院し治療を受けるが、多量の精神安定剤や睡眠薬の処方により、処方薬依存となり通院中のクリニックより他県のIダルクを紹介され入寮した。しかし3日後に無断退寮する。

Iダルク退寮後は、覚醒剤の使用量が増加し家族が手に負えない状態となったため、家族から警察に通報され3度目の刑務所に服役することになった。刑務所を出所後、現在交際中のパートナーと出会い同棲する。間もなく覚醒剤を再使用。パートナーの強い勧めにより自宅から離れた他県にあるAダルクへ入寮した。施設入所中はプログラムを熱心に取り組み、約1年が経過し1ヶ月後に円満退寮を迎える目途となっている。退寮後は、長野県内にある自宅に戻ることにしている。

2 現在の状況と支援の方向

- (1) 処方薬依存の併発に対する医療
- (2) 支援に関係する機関の県を越えた連携
- (3) 家族の当事者活動や本人への関わりへの理解不足に対する支援

3 課題に関する関係者（機関）の関わり

相談対応機関
<p>【保健所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族に対して、薬物依存症の治療を受けられるクリニックを紹介する。 ・家族教室に家族が参加し、薬物依存症についての理解を深め本人への対応の仕方を学ぶよう助言する。
医療機関
<p>【公的病院精神科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬物使用によって起きた精神運動興奮に対して入院治療を行うと共に、他の精神疾患の合併症の有無についての診断や治療を行う。 <p>【依存症治療標榜クリニック】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・処方薬の適量使用の下に精神療法を用いての断薬への動機付け教育を実施すると共に、自助グループのミーティングへの参加を促す。また、本人の特性を把握し、状況に合致したダルクや社会資源を家族に紹介する。
ダルク
<p>【入寮中のAダルク】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・退寮後も自助グループのミーティングへの参加が継続できるように、入寮中より自助グループのミーティング参加を習慣づける。また、退寮後の生活に必要な関係機関や家族、地域の自助グループとの連絡調整を行う。 <p>【地元Nダルク】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入寮中のダルクと連携を図り、自助グループのミーティング参加が継続できるように支援する。

4 相談後の変化

- (1) 本人の変化

自宅のある県内のダルクへの通所利用を経て、自助グループへの参加が継続できるように、地元の自助グループのメンバーの中からスポンサー（相談できる人）を見つけた。
- (2) 家族の変化

ダルク退寮後の自助グループへの参加の必要性を理解し、ミーティングに参加できる環境を整えた。